



美術工芸品

造形と文字が織りなす美の世界



有形文化財のうち、建造物を除いた絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などを総称して「美術工芸品」と言います。

国はこれらのうち重要なものを重要文化財に指定し、さらに世界文化の見地から特に価値の高いものを国宝に指定し、県でも重要なものを県宝として指定して保護しています。

絵画 重要文化財16件、県宝20件が指定されている絵画の多くは仏画です。



けんぼんちやくしよくしょうとくたいし
絹本著色聖徳太子
わちようせんとくれんざいぞう
和朝先徳連坐影像
つひたりけんぼんちやくしよく
附絹本著色
あみだによらいえぞう
阿弥陀如来絵像
(県宝:上松町教育委員会蔵)

上松町の東野阿弥陀堂に伝来したものであり、本来はすでに失われた「十三仏」という仏画と併せて、三幅一対であったとされています。最大の特徴は、和朝先徳の中に、如信、覚如が描かれていることであり、同様のものは他に三例しかありません。



けんぼんちやくしよく
絹本著色
あみだしょうじゆらいごらうぞう
阿弥陀聖衆来迎図
(国重要文化財:長野市・善光寺蔵)

西山の端にかかる満月を背に阿弥陀如来と諸菩薩が極楽浄土から娑婆世界に來迎するという情景描写です。夜景を示すかのように深い藍色の地色で、鎌倉時代にさかのぼる県内最古の來迎図です。

彫刻 重要文化財40件、県宝57件が指定されています。そのほとんどが古代・中世の仏像や神像などです。



せんじゆかんのほんざつりゆうぞう
千手観音菩薩立像
(国重要文化財:長野市・清水寺蔵)

千本の手と、手の掌目によってすべての人たちをもらさず救済しようとする慈悲の心を表しているといわれます。本像は、桂材の一本造で、平安時代前期に製作されたと考えられます。長野県では現存する木造彫刻の中では最古の仏像で、一本造りとしては東日本最古といわれています。



ざおうこんげんぞう
蔵王権現像
(県宝:松本市・牛伏寺蔵)

山岳信仰と陰陽道、仏教が結びついた日本独自の信仰・修験道の信仰の対象となった像です。本像は檜材の一本造で、躍動する全身の動きや強さがリアルに表現されています。平安時代後期の作と見られ、全国的に見ても古い例の一つです。



ほうじょうとらぎちぞう
北條虎吉像

(国重要文化財:安曇野市・碓山美術館蔵)
安曇野市に生まれ、日本近代彫刻の先覚であり、東洋のロダンとまで呼ばれた萩原礫山の作品です。明治42年の第3回文展に「労働者」とともに出品され、高村光太郎が、この作には人間が見えると激賞しました。(石膏原型が重要文化財)

どうぞうぼさつはんかぞう
銅造菩薩半跏像
(国重要文化財:
松川村・観松院蔵)

7世紀の前半に朝鮮半島で製作された渡来仏とされ、日本の仏像史の黎明を告げる最古級の金銅仏と言えます。優しい微笑みをたたえる表情、三日月や房飾りをあしらった宝冠など、優れた製作技術に、渡来仏の特徴があらわれています。





工芸品

主なものとしては、神仏習合を示す御正体、音を鳴らす梵音具(梵鐘・鉦鼓・鯛口など)や刀剣などがあげられます。重要文化財は18件、県宝32件が指定されています。



みしょうたい
御正体

(国重要文化財：大町市・仁科神明宮所蔵)
銅製の円板に大日如来などを取り付けた懸仏で、鎌倉時代後期のものです。重要文化財に指定されている5面のほか、11面が附指定を受けています。



しょうこ
鉦鼓

(県宝：中野市立博物館所蔵)
大正5年に堂平地籍(現山ノ内町)から出土。銅製の円面型で、直径は21.3cm、中央に素文の径13.3cmの円形撃打部を設け、中区および周縁にかまはこ形の子持圏線をめぐらしています。胴部の上方左右には形のよい魚の鱗状の6cm大の吊手がつくりだされ、この吊手には紐を通すために径1cmの孔があげられています。胴には、「観阿弥陀仏 延慶元年(1308年)11月1日」の銘文が陰刻されています。

書跡・典籍

書跡とは、古筆、墨蹟などのことで、「典籍」や「古文書」から一部分を切り取ったものが大部分です。典籍は、書物の意味で、写本と版本があり、内容から国書(和書)、漢籍、仏典、洋書などに分けられます。重要文化財は7件、県宝6件が指定されています。



そうほんかんじょいげんかんほん
宋版漢書慶元刊本
(国重要文化財：松本市美術館所蔵)

南宋の慶元初年(1195年頃)に刊行された中国の正史で、世界に三部しか保存されていないものの一つです。



さなだけせんじょ
真田家文書

(県宝：長野市・真田宝物館所蔵)
真田家に代々伝来する381通の文書群です。武田信玄、豊臣秀吉、徳川家康などの武将の文書をはじめ、真田家の民政に関する文書も含まれています。

古文書

特定の対象(他者)へ意思を伝えるために作成された文書で、近世以前のもを指します。重要文化財4件、県宝5件が指定されています。



とばいんのちょうくだしぶみ
鳥羽院庁下文

(国重要文化財：長野県立歴史館所蔵)

鳥羽上皇の院庁が荘園の管理権を裁定した文書です。信濃國小川庄(小川村付近)の現地管理者(預所)の増設という僧に下されたもの。現存する院庁下文の古い例であり、東日本で唯一の原本として古文書学上に価値が高いものです。



ひらさわもんじょ
平沢文書

(県宝：飯田市歴史研究所所蔵)

虎岩村(現飯田市下久堅北原)の庄屋平沢家に所蔵されていたものです。検地や村落の状況を示す文書が著名で、全国的にも屈指の地方文書です。中世末から近世初頭の文書が多く含まれ、庄屋旧蔵の文書として特徴的な構成を示しています。

歴史資料

歴史的事象や人物に関して学術的価値の高いもの、あるいは歴史的事象・人物に関して歴史的、系統的にまとまって存在するもの、などと定義されています。重要文化財2件、県宝は6件が指定されています。



ながのけんぎょうせいふんじょ
長野県行政文書

(県宝：長野県立歴史館所蔵)

旧藩引継文書を含む昭和21年までの長野県の公文書群で、江戸期を含む明治末期までの文書4,897点、大正期3,278点、昭和期2,039点、合計10,214点が現存し、「長野県行政文書目録」行政簿冊1・2として目録が刊行されています。併せて明治初期からの「達」「布告」など(明治30年から「県報」と称される)の簿冊569点があります。

はんしゃほうえんぎょうくにとまいつかんさいくでんほうごねん つけたりおほえがき
反射望遠鏡国友一貫斎作天保五年(附覚書)
(国重要文化財：上田市立博物館所蔵)

天保5年(1834年)に、幕府お抱えの鉄砲鍛冶であった国友一貫斎(藤兵衛)(1778年~1840年)が、国内ではじめて製作した反射望遠鏡です。木製回転台や太陽観察用のゾンガラス等の附属品類も残り、保存状態がきわめて良好です。江戸時代における天文学並びに金属加工技術の高さを示す資料として、我が国の科学技術史上貴重であり、学術的価値が高いとされています。





考古資料

遺跡から発見された考古資料のうち、造形的に優れたもの、当時の社会や生活を知る上で大きな手がかりになるものが、国や地方公共団体によって文化財に指定されています。重要文化財には、今から30,000年ほど前(旧石器時代)の信濃町日向林B遺跡の石器から、1,000年ほど前の塩尻市吉田川西遺跡の墓から出土した土器・陶磁器等まで10件が、県宝には24件が指定されています。長野県は、「縄文王国」と呼ばれるほど数多くの遺跡があることから、特に縄文時代中期の土器や土偶が数多く指定されているのが特徴です。



かめん めがみ
「仮面の女神」
(国重要文化財：茅野市・
尖石縄文考古館所蔵)

中ツ原遺跡から出土した全長34センチの大形の土偶です。国の文化審議会は平成26年3月、この土偶を国宝に指定することについて文部科学大臣に答申しました。



じょうもん
「縄文のビーナス」

(国宝：茅野市・尖石縄文考古館所蔵)

棚畑遺跡から出土したもので、全長は27センチの大形の土偶です。手は省略されていますが、腕は左右に広げられています。また、小さくつまみ出して乳房が表現され、その下に続くお腹とお尻は大きく張り出しており、妊娠した女性の様子をよく表しています。



とうないせきしゅつひん
藤内遺跡出土品 (国重要文化財：富士見町・井戸尻考古館所蔵)

藤内遺跡から出土した土器や石器など、199点が指定されています。器面を縦方向にいくつか区切り、異なる文様を施す区画土器などが特徴です。過剰ともいえる装飾で飾られた土器は、八ヶ岳西南麓の縄文時代中期文化の繁栄を代表します。



かわらだいせきしゅつひん
川原田遺跡出土品
(国重要文化財：御代田町・
浅間縄文ミュージアム所蔵)

川原田遺跡から出土した土器や石器など146点が指定されています。渦巻き状の曲線と耳状の突起で、器面全体に躍動感あふれる装飾をする「焼町土器」がまとまって出土しています。八ヶ岳西南麓とはちがった縄文中期文化が浅間山麓に繁栄していたことがわかります。